

2023. 1. 8. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書13章31～35節
『自分の道を進む』

わたしたちにとりまして人生を歩む上で一体何が正しいのか判断に迷ったり、時として分からなくなってしまうことが往々にしてあります。

もし、正しいなどというものがあるとすれば、そしてそれがいつでも誰にでも明らかにわかるようであれば、はたしてどんなにか楽なことかとさえ思ってしまう。

けれども、わたしたちが求める正しさというものは、そうでないものや装うもの、否定するものに混ざってあるのです。それは、正しくないものをより分けより分けしてゆく果てしない積み重ねを通してでしかおそらく見つけることはできません。それでもわたしたちのその努力は無駄な徒労に終わるのかも知れません。しかし、この嘗々たる努力の積み重ねなしに、正しさの名に値するような人生はないのでしょうか。

本日の聖書の箇所には「エルサレムのために嘆く」という小標題が掲げられています。物語はファリサイ派の退去要請とその理由から始まります。「ヘロデがあなたを殺そうとしています」(31)とはイエスの側に立った物言いのように聞こえますが、実際は現実的な諸関係のすべてから自分を免れさせる自己弁護と責任転嫁にしか過ぎません。その言葉の本質を見抜いてイエスは出エジプト記19章10節をもじって彼らに答えます。「今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える」と・・・。

ルカはここで「イエスの宣教の道」とは何かを明らかにしてゆきます。それは悪霊の追い出しと病気のいやしという連綿たる日々の作業の積み重ねこそがエルサレムへの旅路であるということでした。さらに、「今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない」(33)というその旅路こそエルサレムでの十字架の死でした。

この「三日目にすべてを終える」、「次の日も自分の道を進む」という言葉の繋ぎは、その旅路のさらなる向こう側に進むということを示しています。それは十字架の死が旅路の終わりでは決してなく、「三日目の完成」と「次の日」で示さ

れた「三日目の向こう側へさらに進む」ということ、つまり「復活」がここに語り出されて行くのです。

当時は人を死に追いやるものは「悪霊」(精神)と「病い」(身体)とおおまかに区分されていました。もともと初代教会の誕生に至るモチーフは「貧しく・低く・弱い」とされ、既存の社会から放逐された精神的・身体的病いの人々への寄り添いと介護でした。

現代と比較すると取るに足りない医学水準でしたから十分な医療が施せたとはいえません。病いとは肉体的のみならず、社会や家族からさえ途絶される死の宣告でした。死がすべての終焉であるとするならば、その寄り添いは徒労なのです。そこには救いのない絶望が待っているだけです。しかし、初代教会はそこに正しさを置きました。患者だけでなく、介護の側も死の向こう側、「復活」を見つめて共に生きようとしたのです。

正しさとは、徒労を要求するものです。そして、イエスの福音、つまり初代教会が「自分の道を進む」と宣言することはこの徒労を受け入れるという宣言なのです。

信仰とはこの徒労に生きる人の味わいであるのです。